

近代語に見られるヨルについて

増井典夫

一、はじめに

「ヨル」について、近代語研究という面から今一度問題点を考える。
まず、『日本国語大辞典』（第二版。初版も同様）でヨルについて見ると、次のように記述されている。

◇よる「助動」 動詞の連用形について、動作主を軽く卑しめる意を表し、また、その動作が進行中であることを表す。

このように、前半に「軽卑語」としての用法、後半に「動作が進行中」という用法が記述される。

この「ヨル」の二つの用法の違いについての問題が、自分自身の研究の、基本の部分として残っている。その問題点を整理していきたいと考える。

二、近世上方語と近畿・東海方言での「ヨル」

では、ヨルについて、前田勇の辞典での記述を見てみる。

よる《助動ラ四》「をる」の訛。動詞連用形につき、軽い罵りの気持を表わす。元禄期にすでに現れ、時と共に盛んになるが、完全に「をる」に取って代わるのは現代に入ってからである。（『近世上方語辞典』、一九六四年、東京堂出版）

よる《助動ラ五》第三者の動作を狎^なれ、またはまたは軽く侮^なつていう。男性専用語。（語源）「をる」の訛。近世上方語（元禄期以来）は、対者・他者の動作にいう。（『上方語源辞典』、一九六五年、東京堂出版）

てよる「ていよる」の約。男性の専用語で、「ている」「ておる」のぞんざいな言い方。ただし第三者の動作にいう。「嫁はんに逃げられて、やもめ暮ししテヨル」（『上方語源辞典』）

このように「軽卑語」としての用法が記述されている。また、棟垣実編『近畿方言の総合的研究』（一九六二年、三省堂）でも、次のような記述が見られる。

書キヨル・見テヨルが継続態と結果態とに使い分けられない地区では、これが第三者の動作を表わす場合だけに、多少見下げた表現として使われる。軽蔑と呼んでは少しオーヴァーで、親愛の意を多分に含んでいるし、聞き手や話し手の動作についても、傍観的（自動的）態度で使うことがあり、非情の物の動作について、雨降りヨル・雨降ッテ

ヨル、と使うと、不利益・迷惑・不快などの意を含んだ表現となる。(『近畿方言総説』、五三頁)

などである。なお、この記述での「継続態」は現在の研究では「進行態」と説明されることの多いものである。

ところで、牧村史陽編『大阪ことば事典』(一九七四年、講談社)には、「トル」は「しておるの約である。トオル。」などとあり、「トオル」の項を見ると、

ておる。キトオル(来ておる)・カイトオル(書いている)などで使用し、「今書いとオンヤ」(今書いておるのだ)などとも発音するが、これは主として男、男の子の用語に見られるものであって、普通にはキテル(来ている)・カイトル(書いている)と使う。一方このオルがヨルとなり、キテヨル・カイトヨルともなるが、これは多少軽蔑の意を含んでいる。

などといったヨルについての記述も見られる。

それでは、ヨルの近世での用例を次に挙げる。

①さりながら大方まづ済みよつたが、一部始終を聞いてたも(曾根崎心中、元禄一六・一七〇三、『近松全集』四卷一三頁、岩波書店)

②こちろきたへきていろくの事をいふてきよる(北華通情、寛政六・一七九四、『洒落本大成』一六、二〇四頁上三)

③しよる しをる也。来をるをきよるといふ(浪花聞書、文政二・一八一九頃、日本古典全集)

④露何をいふぞへ角がいつちりくつがよい芝翫といふやつはゑらいやつじや給金とらずにはたらきよる李還がかなう

ものか(粹の曙、文政三・一八二〇、『洒落本大成』二六、二九七頁上二二)

⑤ **母** わたしも其だめヲをしたら。新らしいもあたらしい此うへなし。それでもこはけりや。どく味にさんじませうかと笑ふてゐよつた(箱まくら、文政五・一八二二、『洒落本大成』二七、一四三頁上一五)

⑥ わしけふ嶋原の井筒屋へいたらゑろあやまつてゐよるなあ初手のよふにぼんつきよるとよこづらはつてやろとおもたにゑろくへイくいふたよつてかんにんしてやつた(興斗月、天保七・一八三六、『洒落本大成』二九、一三五頁上一五～一六)

⑦ 梅尾のべらぼう早ふきよるとよいにあした一ばんりくついわんならん(同、一三六頁上八)

①～④は大坂の例、⑤～⑦は京都の例である。

いずれも待遇表現的で「軽卑語」とまとめてもよいもののように思われる。近世期以降の上方・京阪では、ヨルは基本的には軽卑語として用いられてきた、とまとめてもよいのではないか(トルはアスペクト表現だと見てよいであろうが)。

ところで、上方の女性はヨルを使つてきたのか、という点も気になる問題であるが、①(話者・徳兵衛) ②(喜多市) ④(露雪) は男性の使用例であるが、⑤「箱まくら」の母親の例及び⑥⑦の「興斗月」の例(話者は義太夫芸子浅吉)は女性の使用例であり、当時は上方の女性もヨルを使用したと見てよいように思われる。

さて、日本語史の中でヨルの記述を行う場合、手順として、先の近世上方語の記述から、考察は進めて行かねばならないであろう。そうすると、ヨルを、アスペクトというよりもむしろ、モダリティの意味として捉えるところから始める必要が出てくると思われる。

ところで、丹羽(二〇〇五)では次のような記述がなされている。(資料は「岐阜県土岐市・愛知県犬山市及び江南市のものである」)。

ユキガフットル（雪が降っている）

ユキガフリヨール（雪が降りつつある）

意味の相違が完了と進行であれば、フットルは既に積もっている場合であり、フリヨールは今降っている最中である。しかしフットルは降っている最中にも使える。この場合にトルが使えるのは動詞の意味によるのであり、「死ぬ」などの瞬間動詞ではこのようなことはない。この点に着目して標準語のテイルが動詞分類の基準になることもある。しかしその前に「降る＋トル」や「降る＋テイル」が両方を表し得る理由を整理し、ヨルとの相違を明らかにしなければならぬ。（丹羽一彌『日本語動詞述語の構造』（笠間書院）九四～九五頁）

ヨルは現場での目撃情報である。（『同書』九六頁）

近畿中央部のヨルは待遇表現に使われるが、待遇というのは現場での人間関係に関わることであるから、目撃とまでは限定できないにしても、話し手の主観や状況判断の顕れである。（『同』九七頁）

なお、ここでの「近畿中央部」とは京都大阪を中心とする地域を指すものと考えるべきもので、例えば神戸方言などはここからはずれるようである。^①

丹羽前掲書には次のような記述もある。

従来の説の話が難しくなるのは、ヨルの持つ意味全部がトルと対立するものと考え、全てをアスペクトという所与の意味範疇の中だけで説明しようとするからである。ある理論で説明できない食い違いがあれば、理論より事実を優先すべきであろう。それぞれの言語事実を詳細に観察し、それに適した枠組みを帰納的に設定して処理すれば、もう少し話は分かりやすくなるのではないか。近畿以東の方言のヨルの意味や職能は、アスペクトという分野から離して考えれば整然と説明できることが多い。一般化とか他の言語と比べるといふのはその後のことである。

トルとヨルはアスペクトという文法範疇の中で対立している形式ではない。トルは実現状態の継続という客観的なアスペクトを表し、「命題」を構成する形式である。ヨルの方は現場での目撃・経験という個人的な主観であり、「判断」を構成する形式である。両者は職能の異なる別の種類の形式である。（『同』一〇〇～一〇二頁）

現代でトルとヨルが使われている方言全てに、この丹羽の説明を当てはめるのは、なかなか難しいものがあるようだが、少なくとも、近世上方語と現代京阪（を中心とする）方言及び東海方言では、この説明（トルはアスペクトでヨルは違うということ）を十分念頭に置いて考察を進めるのが妥当であろう、と現在筆者は考えている。

三、西日本方言に見られる「ヨル」について

さて、現代の西日本方言のアスペクト表現では、

トル	完了（結果の継続）
ヨル	進行（状態の継続）

の意味・用法を持つとされている。

例えば工藤真由美編『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系』（二〇〇四年、ひつじ書房）には、

京阪地区を除く西日本の広い地域に分布する方言では、〈進行〉は「桜の花が散りよる（散りよー、散りゆー）、〈結果〉は「桜の花が散つとる（散つちよる、散つとー）」のように、別の形式で表し分ける。（『同書』二頁）

とある。

ところで、湯澤幸吉郎『徳川時代言語の研究』（一九三六年、刀江書院）では、次のような記述がなされている。

【注意】「ておる」の例は余り多からず、その場合には「て居る」を用いるのが普通である。

この場合に「て」を略して、「読みおる」「書きおる」の様にする言方は、京阪地方には用いないが、地方には行われたものらしい。「忠臣金短冊」（享保十七年豊竹座上演）第三に、大岸力弥が島原の遊女屋に訪ねて行つて、「然らば（吾ハ）爰に待ちおらふ」と言うに對して、亭主の女房が応待した詞が、

◇お若衆の待おろはお國詞か、そんなら私も勝手へ立ちおらふ。デエお茶くんて来をらふと、ひんしやんとして入りにけり。

と見える。これは京阪地方で「待つておろう」と言うのを、「まちおろ」と「て」を抜いて言つた為に、わざとからかつたのである。（二五〇頁）

この湯澤の「待おろはお國詞」云々についての記述は、西日本方言の、進行態のヨルにつながるオルの記述かとも思われるものである。

なお、湯澤は【「おる」の補助的用法】の記述として、

動詞・活用連語の連用形に附いて、動作主を卑しめ置く意を表す。(同書一四九頁)

とし、

【注意】「おる」が「よる」となることがある。(同)

と記述し、曾根崎心中(元禄一六・一七〇三年)の例(①)等を挙げている。

上方及び近畿中央部とそれ以外の西日本のオル・ヨルの用法の分化が、近世において既に窺えるようにも思われる。

が、「ヨル」は上方語では当初から待遇表現として用いられていたものであり、明治期より前、近世において既に、上方語と西日本方言とは、ヨルの用法は違う枠組みで説明されるべきであったのではないかと考えている。これまで筆者は、「近世上方語および京阪(を中心とする)方言のヨル」(A)と、「西日本方言におけるヨル」(B)を統一的に説明しようと考えてきたが、その考え方にはなお困難な所があり、AのヨルとBのヨルは別物と捉えて考察を進めていくほかはないと考えるに至った。Aはアスペクト的意味というよりも「判断」を構成するもの、Bはアスペクトを構成するもの、と分けて捉える考え方を取る必要がある、ということになると現在は判断している。

なお、「アスペクト形式においてヨルが消滅し」、「進行と結果の区別をなくし、トルに一本化」された、「ヨルはアスペ

クトの意味を失い、いち早く待遇的マークになった」「言語変化の大きな方向性としてはオル系「ヨル」「トル」はともにアスペクト表現から待遇表現のそれに移行しており、オル系「ヨル」「トル」として一括して扱いたい」などとらえる論考⁽²⁾があったが、上方語では、ヨルは当初からアスペクト表現ではなかった、と捉えて考えていく必要があるとするのが自然なものかと思われる。

ただし、「ヨルの待遇化」に添う考え方として、「ヨル」が上方語として文献で捉えられる以前、近世初期までに「進行」を表す用法のものとして現れた上で、上方で卑語化した、という説明が示されている。青木博史「補助動詞「〜オル」の展開」(『和漢語文研究』六号、二〇〇八年、京都府立大学)で、青木は次の抄物の「進行」を表す「ヨル」の例を挙げている。

我レ此間獄中二百日アリシガ、今漸春ニナリ天恩於万物時分ニナリヨル程ニユルサレテ出獄帰ゾ(『四河入海』
一五三四年成立)(卷二五ノ四・一八オ)

その上で、「進行」を表す「ヨル」が、「室町末江戸初期以降」に卑語化したとする。

ただ、「中世末近世初期以降」といっても、遅くとも近世前期の元禄年間以前ということになる。また、上方語では、これまで用例で見てきた通り、当初から卑語として用いられてきたわけである。

もう一つの問題点として、青木が挙げている「ヨル」の例が一例のみであること、ということがある。弧例の扱いの問題、ということになるのであるが、考察において、確定事項として扱ってよいものかどうか、という点になお疑問が残るようにも思われる。もちろん、他の例が見つかるようなら、この考え方を第一に考察を行わなければならないように思われるが、現状、これで決定とは行かないようにも思われる。ともあれこの点は、今後更に検討を続けたい。

四、保科孝一の「ヨル」(「関西地方」)

以上、近世においては既に、上方語と西日本方言とでは、ヨルの用法は違う枠組みで説明されるべきもの、となっていたと思われる。この方向で考え、検討を進めるべきか、とも思われるが、現代の西日本方言の「アスペクトとしてのヨル」の用法は、明治期の保科孝一の記述くらいまではさかのぼれるが、さらにそれ以前の中央語との関連を文献上捉えるのは、なかなか難しい所があるもののように思われる。

保科孝一の「ヨル」についてだが、まず、保科が関わった「国語調査委員会」の、「口語法取調ニ関スル事項」(明治三六・一九〇三年)には第十九条(及び「口語法調査報告書(上)」(一九〇六年)の第十九條)だが、

「指して居る⁺」、「受けて居る⁺」ヲ、「指してる」「受けてる」ト云ヒ、「指して居る⁺」「受けて居る⁺」ヲ、「指しとる」、「受けとる」、又ハ、「指しちよる」、「受けちよる」、ト云フコトアリ、何レヲ用キテアルカ。

などと「テル、トル、チヨル」の調査を行っている。

その上で、第二期調査である、「口語法取調ニ関スル事項」(明治四一・一九〇八年)の第十三條で、

動作の引き続きあることをあらはす語遣、如何。雨ガ降ッテイル。風ガ吹イテイル。鐘ガナッテイル。橋ノ上二人ガ立ッテオリマス。(雨ガフリヨル。車夫ガ巡查ニ叱ラレヨッタ。関西地方。雨ガフッテアッタ。車夫ガ巡查ニ叱ラレテアッタ。本ヲヨンダッタ。東北地方)の類。(『明治以降 国語問題諸案集成下巻 文体・語法・音韻・方言 編』)

吉田澄夫・井之口有一編、「第二部 語法編」所収、昭和四八年七月、風間書房)

などと「関西地方のヨル」を含む調査を行おうとしている。ただ、この項目を含む第二期調査は、「かようにして慎重に進められた調査ではあったが、不幸にしてその調査結果は公表されずに終わった。」(『同』「解説」ということであり、大変残念なところである。調査結果をまとめるのに、困難な部分が多かったのか、とも想像されるところであるが。ともあれ、保料は、この後、ヨルについて次のような記述を行っている。

関西地方では、進行現在の形式として、食ヒ居ル、見居ル(実際の発音においては食イヨル、見ヨルと違って居る)といふのを、食ツトル、見トルといふ、現在の形式から区別して用ゐて居るところが多いが、関東地方には、この区別が殆ど存在しない。例へば、猫ガ死ニヨル、火ガ消エヨルと、猫ガ死ンドル、火ガ消エトルの区別は、関西地方には存在するが、関東地方にはないのである。(『国語学精義』、明治四三・一九一〇、同文館、二八八頁)

現在の東京語には、進行現在と現在との区別がないが、関西方言には、この区別が厳然として存在するので、此習慣は将来の標準語に採用する必要がないか何うか、やはり問題であろう。例へば、関西地方では、猫ガ死ニヨルと、猫ガ死ンドル、火ガ消エヨルと、火ガ消エトルの区別が、厳然として存在するけれども、東京語には、猫ガ死ニヨル、火ガ消エヨルに相当する言ひあらはし方がない。猫ガ死ニカケテ居ル、火ガ消エカケテ居ルと云ふ言ひあらはし方があるけれども、固より同一に見ることが出来ない。それゆゑ、この進行現在の形式は、将来の標準語に採用する必要がないか何うか、研究を要する問題である。(同書、四七八頁)

このように、保料はトルを「現在」の形式、ヨルを「進行現在」の形式として捉えているわけである。³⁾ただ保料は、今日一般の用法同様に「関西」を「近畿地方」の意味で用いていると考えられるが、これまで見てきたよ

うに、近畿中央部は「ヨル」は「軽卑語」として用いられるものであり、明治期でも「進行」の用法とは違ったと推察される。

ここで、榎垣実編『近畿方言の総合的研究』（一九六二年、三省堂）を見ると、次のような記述が見られる。

継続・結果―たとえば帯を結んでいる動作が進行中であることと、すでに結んでしまつて帯が結ばれた状態にあることとを、共通語では共に「帯を結んでいる」と表わすが、これを次のように区別して表わすことがある。

ムスビヤアル　ムスビヨル　ムスビイル　（継続）

ムスンダアル　ムスンドル　ムスンデル　（結果）

もちろんすべての動詞にこの表現が使えるわけではなく、多少の制限はあるが、アスペクトという文法範疇に入れて、未了態・完了態と考えることもできよう。この区別は南近畿・北近畿および神戸市以西に勢力がある。ただし、この区別もおいおい混同されて、結果態で継続・結果の両方を無差別に表わす方向へ進んでいる。おそらく共通語の影響だろう。原形は動詞の連用形にアル・オル・イルの続いた形と、テアル・テオル・テイルの続いた形との差だから、《イルを有情（生物）に、アルを非情（無生物）に》という原則の行われない土地でなくては、アル・テアルカイル・テイルだけを使うことはない。しかし、オル（有情）とアル（非情）が使い分けられる土地は周辺部にある。

書キヨル・見ヨルは中近畿でも使われないわけではないが、待遇意識が加わって、用法が変わる。すなわち、話し手・聞き手の動作には使わず、したがって、書キヨレ・見ヨレという命令形がなくなってしまう。またこの場合には、書イテヨル・見テヨルで継続・結果の両方を表わすから、書キヨル・見ヨルには継続の意は極めてうすくなって、その

ため軽蔑の意がそれだけ強くなる。(「近畿方言総説」、五〇～五一頁)

とある。あるいは、近世以降、明治期でも現代でも、近畿の中で「ヨル」の用法が二つに分かれていたかと推定されるものかと考える。

五、おわりに

近畿中央部での「ヨル」は近世以降では、現代に至るまで「軽卑語」の用法だけしか文献では確認できていないのであるが、一方で「進行」を表す用法も近世以降、近畿中央部以外の西日本では実は脈々と使われ続けていたのではないかと考えるに至った。具体的に説得力ある形で示すことを今後の課題としたい。なんとかそれを示していけるよう、努力を続けたいと考えている。

注

(1) 神戸市方言のヨル(ヨー)は中立的アスペクトの意味で用いられ、(進行)(状態の継続)を表すという。(久木田恵氏の御教示による)。

(2) 例えば中井精一「上方およびその近隣地域におけるオル系「ヨル」・「トル」の待遇化について」に見られるような説明である。

「ヨル」と「トル」については、感覚的「ヨル」の方が軽卑度が強いように感じられる。これはアスペクト形式において進行と結果の区別をなくし同一の形式で表現される過程で、「ヨル」が消滅し「トル」に一本化することに起因している。

つまり「ヨル」がアスペクトの意味を失い、いち早く待遇的マークになったのに対して、「トル」はアスペクト性をより遅くまで保持してきたため、感覚的「ヨル」の方が軽卑度が強いように感じさせるのである。しかしながら、言語変化の大きな方向性としてはオル系「ヨル」「トル」はともにアスペクト表現から待遇表現のそれに移行しており、オル系「ヨル」「トル」として一括して扱いたい。(『国語語彙史研究二』(二〇〇二年、和泉書院) 左二八頁)

しかしながら、これまで見てきたように、「ヨル」は上方語では当初から待遇表現として用いられていたものであり、アスペクト性の消滅云々を論ずることはなかなか文献的には難しいところが残る。「トル」の待遇化については今後の課題として検討を行っていききたい。

(3) この記述でのヨルは、先の丹羽のいう「現場での目撃・経験という個人的な主観であり、(判断)を構成する形式」を指しているとも考えられるように思われるのだが、無理があるだろうか。もう少し検討を続けたいと思っている。また、保科のいう「標準語への採用」の問題についても、さらに検討を重ねたいと思っている所である。

主な参考文献(先に挙げた以外のもの)

- 井上文子『日本語方言アスペクトの動態』(一九九八年、秋山書店)
- 井之口有一・堀井令以知(編)『京都語辞典』(一九七五年、東京堂出版)
- 金沢裕之『近代大阪語変遷の研究』(一九九八年、和泉書院)
- 金水敏『日本語アスペクトの歴史的研究』(二〇〇六年、『日本語文法』六巻二号、くろしお出版)
- 金水敏『日本語存在表現の歴史』(二〇〇六年、ひつじ書房)
- 工藤真由美『アスペクト・テンス体系とテクスト』(一九九五年、ひつじ書房)
- 工藤真由美『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』(二〇一四年、ひつじ書房)
- 坂隆三『近世語法研究』(二〇〇六年、武蔵野書院)
- 陣内正敬・友定賢治(編)『関西方言の広がりとコミュニケーションの行方』(二〇〇五年、和泉書院)

- 津田智史「トル形の表す意味」(二〇一五年、『方言の研究1』所収、日本方言研究会編、ひつじ書房)
- 寺島浩子『町家の京言葉——明治三〇年代生まれ話者による——』(二〇〇六年、武蔵野書院)
- 中井幸比古(編)『京都府方言辞典』(二〇〇二年、和泉書院)
- 中井幸比古「幕末期京都語について」(二〇〇七年、『新撰組 京都の日々』所収、東京都日野市)
- 堀井令以知『京都語を学ぶ人のために』(二〇〇六年、世界思想社)
- 堀井令以知(編)『京都府ことば辞典』(二〇〇六年、おうふう)
- 増井典夫『近世後期語・明治時代語論考』(二〇一二年、和泉書院)
- 柳田征司「近代語の進行態・既然態表現」(『近代語研究八』所収、一九九〇年、武蔵野書院)

(文学部・文化創造研究科教授)